

『振り返り』研究のまとめ

文責 野口（南小）

○こんなお悩み…ありませんか？

- ①毎回、授業と授業の繋がりがもてず、子どもたちがいまいちのってこない。
- ②授業が、学力中位層のためのものになってしまい、上位層や下位層の子どもが退屈している。
- ③子どもたちの繋がりが薄く、学び合う環境づくりが十分にできない。



もし、こんな困り感のある先生がいらっしゃいましたら、ぜひ今回ご紹介する『振り返り』を試してみてください。

効果的な『振り返り』を行うと…

- ①『振り返り』をすることで、子どもたちの授業への意欲を高めることができる。
- ②『振り返り』をすることで、前後の授業を繋ぐ役割を果たし、繋がりのある授業を展開できる。
- ③『振り返り』をすることで、どの児童・生徒も参加できる環境ができる。



…かもしれません。

今回は、実践研究から導き出せる、効果的な『振り返り』の在り方を紹介します。

1. そもそも『よい授業』とは？

(1) 『よい授業』とは？

本部会の研究テーマである「すべての子どもが、「できた!」「わかった!」を実感できる授業」を『よい授業』とした場合、「できた!」「わかった!」とは文字通りこれまでできなかったことができるようになることであり、これまで分からなかったことが、分かるようになることである。時には逆に「分わからない」状態（混乱した状態）を作り、解決していくプロセスを取る場合もあるが、一つ一つの授業は、単元を構成する要素であり、「分わからない」状態の授業も、最終的にはより深い「できた!」「わかった!」を導くプロセスとして位置づけられた授業といえる。

つまり、よい授業とは、「子どもたちの、物事に対する理解が深まること」である。そのために、教師はあの手この手で子どもたちを理解に導く努力を日々、行っているのである。

(2) 『振り返り』を行うことで『よい授業』が成立しやすくなるのか？

『よい授業』が成立するためには〈教師〉が要因になる場合、〈子ども〉が要因になる場合、〈教師—子ども間〉が要因になる場合、〈子ども—子ども間〉が要因になる場合、〈教室環境〉が要因になる場合、…など多くの要因があり、その要因一つ一つを意識し、整えながら日々授業を実施していくことは現実的ではない。そこで、①教師にとって子どもを理解することに繋がり、②子ども自身にとって自己理解を深めることができ、③子ども同士にとっても繋がりを生むことが自然とできる方法があれば『よい授業』が日常的に実施可能になる。今回、『振り返り』を実施することで以上の三点の条件を満たすことができるのではないかと考え、実践研究を行った。そこで得た知見について、以下に記す。

2. 『振り返り』のやり方と効果

(1) 「生徒の自己理解を深める振り返り」

[方法] _____

- ・授業で分かった内容、分からなかった内容を記述する。
- ・理解度を◎○△で記入する。
- ・小テストを行い、その点数や復習の必要性を記入する。

[結果・効果] _____

- ・自主学习やテスト前において、何を復習すればよいか生徒自身で見出すことができた
- ・小テストの結果を記入することで、自分の点数の変容が可視可され、意欲を高めることができた。

(2) 「教師の生徒理解を深める振り返り」

[方法] _____

- ・振り返りカードを作成、記入させ、わかった具合を◎○△で自己評価させる。
- ・「わかったこと」、「大切な内容」、「いまいちよく分からなかったこと」の3段階で記

入する。

- ・毎回回収、教師がチェックし、次時の最初に生徒に紹介する。

[結果・効果] _____

- ・生徒の理解度を児童の振り返りカードから理解でき、次回の授業で復習する場所が明確になった
- ・どの場所ですみずきやすいのかが、振り返りカードから読み取ることができ、教師の単元理解に繋がる。
- ・支援が必要な生徒を把握でき、手厚く机間指導できる。

(3) 「持続可能な振り返り」

[方法] _____

- ・自由記述で振り返りを書かせたり、「①やったこと」、「②分かったこと（分からなかったこと）」、「③次にやってみたいこと（次に生かしたいこと）」に分類し書かせたりして、児童の記述内容を分析する。

[結果・効果] _____

- ・振り返る視点が明確になり、書きやすいという児童が多かった。
- ・振り返りをパターン化することで、児童は書き方に慣れ、また教師は次時の授業で扱うポイントが明確化され、全体的な負担が軽減する。
- ・継続して振り返りを行うことで、「書く」ことに慣れることができる。

(4) 「子ども—子ども間を繋ぐ振り返り」

[方法] _____

- ・授業の最後に振り返りを書かせ、その内容を次の授業の冒頭で紹介する。
- ・匿名で紹介することで、思ったことをそのまま記述できる環境づくりを行う。

[結果・効果] _____

- ・分からなさを共有することができ、「～が分からない」という振り返りに対して、別の児童が答える姿がみられた。結果、一人も取り残すことがないような環境づくりができた。
- ・振り返りに問題を書く児童もおり、その問題を取り上げることで子どもたちの問題解決に対する意欲が高まった。
- ・パソコンを用いることでログが残り、単元全体を通して振り返りをさかのぼって紹介することができた。

3. まとめ

以上の実践から、『振り返り』を行うことで、教師、子ども、教師—子ども間、子ども—子ども間、それぞれにより影響を与え、『よい授業』につながることを示唆された。

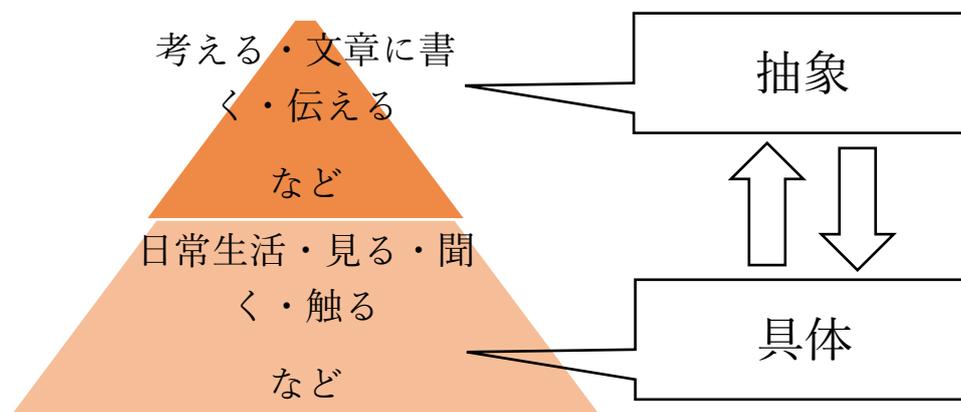
4. 資料（理論的背景）

『抽象と具体を行き来する力』を身につけるということ

○ 学ぶことで得られる力の一つとして「抽象と具体を行き来する力」がある。勉強でも仕事でも、出来事を抽象化して知識化することで、他の状況でも転用可能になる知識となる。そこで何かを学ぶ際には、抽象的なものを具体化したり、具体的なものを抽象化することが肝要となる。

そこで、『振り返り』を行うことで、授業内で具体的なことを学んだのなら、出来事を言語化することで抽象化し、俯瞰してみたり、抽象的なことを学んだのなら、具体化し、日常生活と結びつけてみたりすることで理解を深めることができる。

このことを意識して振り返りを行うことで、子どもたちの授業への理解が深まる。理解が深まれば、授業が楽しくなる。授業が楽しくなればさらに理解が深まる…、という好循環が生まれる。この循環のきっかけに『振り返り』がなりえるのである。



○ 「わかったつもり」から「わかった」へ

「わかったつもり」の状態か、「わかった」状態かを見分ける方法の一つに、出題方式を変えた問題を解かせる方法がある。例えば、数学において式から答えを導き出せるが、文章題になったとたんに解けなくなる場合、この生徒は抽象化された数字のみを扱うことはできるが、具体的な状況、場面では利用できない状態ということになる。そこで、『振り返り』を書くとき、『今日、勉強したことはみんなの生活の中でどういう風に使えるかな。書いてみよう。』と言葉かけを行うことで、子どもたちは数字を具体物と結びつけ、抽象から具体へと思考をシフトできる。もちろん振り返りに限ったことではなく、授業中も可能であるが、先述のとおり、次時のスタートで具体を共有することで、全体を『具体と抽象の行き来』させることができる。